銀狐抄

宮本徳蔵

新潮社

銀狐抄

宮本徳蔵

新潮社

銀狐抄（ぎんこしょう）

著者◉宮本徳蔵（みやもとくぞう）
©Tokuzō Miyamoto
1994, Printed in Japan

発行　一九九四年八月三〇日
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
162　東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(03)三二六六—五一一一
編集部(03)三二六六—五四一一
振替　東京四—八〇八
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
ISBN 4-10-380902-7　C0093
価格はカバーに表示してあります。

銀狐抄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

1

琴子は三つか、四つか。いや記憶が鮮やかなところよりすると、五歳くらいにはなっていたのかもしれない。

とーぼった　とーぼった
大文字が　とーぼった
大文字が　とぼったら
こんこんさーん　遊びまひょ

白川の流れが鉤の手に曲る新橋のたもとに、広場とも呼べない寸詰まりの明地があ

る。三本の小路がまじわっており、ふだんなら祇園のなかでも車や人の往き来の多い一角だ。石畳に落ちる日差しが翳っていたのを覚えているから、午後四時ごろか。ふしぎに人気の絶えたのをよいことに、幼女ら四人だけで遊び惚けていた。

こんこんさーん　遊びまひょ
いま寝てます
こんこんさーん　遊びまひょ
いま顔洗うてます
こんこんさーん　遊びまひょ
いま髪解いてます
こんこんさーん　遊びまひょ
いま鯛のお刺身でご飯食べてます

いっしょにいたのは衣子、真魚子、やす子。いずれもお茶屋の跡とりで、のちに弥栄小学校や女紅場に上がると机を並べるようになった間柄だ。隠れんから始めてお手玉を取る。廓の子は縄飛びのみは敬遠する。和服の裾がからまって「塩梅良ういかん」せいだろう。くちずさんでいたわらべ唄の文句からいって夏の終わりとも思える

が、じつはもっと早く、七月の半ばか。袖を通し初めの浴衣にばりっと糊がきいており、うぶな薫りが付きまとっていたからだ……

衣子が急にだだをこねはじめた。理由ははっきりしないが、先刻から琴子の独り勝ちがつづいているのが気に障ったのだろう。色の白さなら琴子以上で頸すじの辺りなど透きとおるほどだけれど、どこか病い持ちめいた印象は拭えない。手も足もほそぼそとして元気がない割には、いったんこうと言いだしたが最後、あとへは退かぬわがままぶりが目立つ。

こんな場合、たいていは真魚子が仲裁に入る。小麦いろを通り越して浅黒いという に近く、骨組みもがっしりしている。大人びた分別も持ち合わせていて、角張った肩を怒らせながら意見をのべるとうまく取りまとめてしまう。ところがこのときばかりはどうした風の吹きまわしか、衣子に同調して金切声をあげた。

「狡いわ、琴子はん。何ぞあてェらの知らん手ェ使てはるんと違うか」

顔にも姿にもこれといって特徴のないやす子は、ひとことも口をきかない。ただ気弱げな表情を浮かべて他人事のように成りゆきを見守っているきりだ。

琴子の子どもらしくもなく腹よかな胸のなかで、生来の怒りっぽさがめらめらと炎

を噴きあげそうになる。それでもそんな気持は辛うじて押し殺し、頬に笑みを絶やさない。せいいっぱい妥協して、じつは舞妓で出ている従姉からこつを手ほどきされたと告白する。三人は納得せず、抜け駆けめいたやり方は今後二度としないことを誓わせられる。四本の小指が蚕のようにからみ合い呪文を唱えた。

指切りげんまん
嘘ついたら
欠けイカキ（笊）で
血ィ三杯呑ォまそ

「血」という言葉を口にするさい、真魚子の細い眼が嬉しそうに光るのがはっきりわかった。琴子も少しも臆するふしはなく、対抗上、靨を凄みを帯びたかたちに歪めて見せた。

手加減を加えたにもかかわらず、形勢は一向に変わりそうにない。何ごとにせよ三人が束になったとて、しょせん琴子の敵ではないのだ。

衣子がまっさきに飽きた。お手玉を袂にしまうと、背を向ける。べんがら格子にはさまれた小路を足早に歩きだす。

大文字が　とーぼった
もう往んでこっと　大文字
もう帰ろっと　大文字

やや当てつけがましい歌声がお木履の音にまじって響くと見る間に、小さな影法師は犬矢来の向こうに消えた。真魚子も弾かれたようにあとを追う。こちらは悠揚迫らず、大股に離れてゆく。

きっかけを失って取り残されたやす子は、なお二、三分間相手をつとめていた。だがぎごちなくお辞儀をひとつすると、聞きとれない低い声で言いわけしつつ、同じ方角へと去った。

琴子はひとりぼっちだった。寂しくないといえばむろん嘘になる。でもこれはこれで性に合っているのだろう。厄介払いしたという思いの方が強かった。絹糸で縢ったゴム毬を突きはじめる。広いスペースを今は誰はばからず使うことができる。三叉路に接して辰巳明神の祠がある。毬は弾んでおのずと鳥居の下へ飛んでゆく。いつの間にか御手洗や賽銭箱の前まで遊び場に含まれてしまう。幼女は頓着せず無心に戯れた。

毬の動きは身勝手そのものだ。狭い境内と街路を何度も往復した果てに、とうとう

新橋のまんなかにかの女を誘う。木の欄干にぶつかってぶざまに転がった。

腰をかがめて拾おうとする手をすり抜けて、すでに二、三メートル先にいる。そのとき、自分の前を一つの影がふっと横切ったような気がした。

通行人だった。背丈は琴子の三倍もあると思ったが、大人の男としてはまず並みかもしれない。花見小路の方向から歩いてきたか、祠の背後から出てきたのか、その辺もはっきりしない。

横合いから奪うというより、毬の方でおのずと掌のなかに跳びこんでゆく錯覚があった。長い膝が曲げられた形跡もない。男は一瞬こちらを振り向く。左右の目が細く吊り上がり、口はやや尖っている。顔のほかの造作がどうだったか、もう覚えてはいない。たぶん、むしろ平凡な容貌だったのだろう。小さな拝殿の両脇にうずくまっている使姫(つかいひめ)、石の狐が何となく思い浮かべられた。好意も悪意もそこには読みとれず、白紙のように無表情である。

幼児に属するものを返そうとするごとく、骨張った腕がさし延べられる。そのまま機関(からくり)仕掛けの感じで体が百八十度回った。映画のスロー・モーションを見るような緩慢さだから、何かに気圧された躊躇らいさえなければうまく取り戻せたにちがいない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

灰いろの無地の背広姿が横向きになる。スリムを通りこして優形（やさがた）という古風な部類に入る男の背中が視野いっぱいにひろがったとき、毬は手をはなれた。いったん宙高く躍りあがったあと、放物線をえがいて上流側の手摺を越える。飛沫（しぶき）とともに河面を打つと同時に、ちっぽけな図体とは不釣合いな音を立てた。不当な扱いに抗議する悲鳴のようにも聞こえた。

琴子の細い咽から叫びにならない叫びが洩れた。帯を解き浴衣を脱ぐ機転もきかなかったのは、失われかけた宝への未練が幼い者を一時的にもせよ修羅の心にしていたせいだろう。泳ぐすべを知らぬ気後れも無謀を引き留める効果はなかった。現にそれは渦に呑み込まれもせず、漣（さざなみ）のまにまにほぼ同じところを浮きつ沈みつしているのだ。岸と水面との差がわずか四、五十センチで、つい手を延ばせばたやすく掴めそうに見えることも錯覚を助長した。

擬宝珠（ぎぼし）につらなる苔むした石肌のぬめりが蹠（あしうら）に残った。冷たさが膝より腰に這いのぼってくるまで、水のなかに飛び入ったという実感はなかった。

上から眺めて想像していたにも増して、呆気ないほど浅い。底を満たしているのは泥ではなく、さらっとした砂の微粒である。そいつは飽くまで白く、流れのなかのす

べてのものを透明に晒すには持って来いの小道具だった。叡山中腹の花崗岩が削られて生じた砂には、しかし、たとえ子どもにもしろ人間の体重を支える力はない。

踏んばろうとするより早く片足はめり込み、別の足を軸に抜こうと焦ってもむなしかった。流速は緩慢とはいえ腓に食い入る水圧は思いのほかきつい。嬉しや毬は、橋脚の一本にひっかかって鼻のさきにゆらゆら漂っている。苦労してにじり寄ったのがさいごの努力である。両足を一緒に引き抜いた瞬間、支点を失った体はどうと横倒しになった。

起きあがろうとすれば起きあがれたかもしれない。まださほど疲れているわけではなかったからだ。助かりたいより毬を取り返すのを優先したのは、我ながら理解しにくい心の動きだった。わざとそのままの姿勢で押し流されるにまかせ、丸い柔かな物体が指に触れると同時にしっかと抱え込む。逃げようとしてもすでに遅く、橋桁に頭をぶつけそうになる。本能としか呼びようのないものが咄嗟にはたらいて、できるかぎり身を低く、仰向けに寝そべる恰好をとった。橋板のごつごつした裏側が間一髪の危うさで目の上を走り抜けていく。真暗な天井というより、奈落に通じるトンネルにさしかかったような怖さがあった。

瞼を刺す眩しさからふたたび明るみに出たことがわかった。体のそこここを撫でまわしてみて、あっと声を上げかけた。傷はないようだが、どこでもすべすべの地膚にじかに触れるではないか。橋の下をくぐるあいだに帯が解けたらしい。薄い浴衣は繁茂した藻にからまれ、すっぽり脱落したのであろう。恥かしさに動転し、岸に近づこうとする努力は二の次となった。

長く大きな影が差し、おのれを見つめるひとつの視線に気づいた。例の、目尻の吊ったグレイの背広が欄干から半ば以上も身を乗りだし加減に、こちらを眺め下ろしている。頬骨の尖った細面には依然として何の表情も浮かべられてはいない。むろん救いの手をさし出す素振りもなく、事の成りゆきをひたすら冷静に見届けるといった按配であった。

琴子にそのとき、変化が起こった。声を発して助けを求めたり、自力で岸に這い上がろうと試みたりする気持は失せていた。反対に、いつか新京極の映画館で見てほのかに記憶している溺死体を真似て、仰臥のかたちで川波にはこばれるにまかせたのである。

南から西へ、流れの向きがほとんど直角に折れる汀に、名物として誰知らぬ者もな

い桜の巨樹が枝振りの良さを誇っている。春ならば当然、川幅いっぱいうすくれないの花弁を散り敷かせていたことだろう。今はただ、石崖のあわいに咲いた紫陽花の青がちらっと目のはしに捉えられたにすぎなかった。泳ぎは心得なくとも、思いきって立ってみる価値はあったかもしれない。透明な底は浅く、四歳児の背丈でも足が届かぬとはちょっと考えにくかったから。

またしても暗闇のなかに入る。巽橋(たつみばし)である。切通しの小路に通じており、お座敷へ急ぐ舞妓や男衆(おとこし)がいつも肩を触れ合いそうにすれ違う場所だが、あいにく時刻が早すぎた。あっという間に通り抜けてしまい、光の世界に戻った。まだ水を呑んでいないだけが幸運とせねばなるまい。

期待を込めて首をねじ曲げ、橋上を仰ぎ見る。やはり、いた。男は先刻と寸分違わぬ姿勢で穴のあくほど幼女を凝視している。ただ何分にも手摺が低いので、すらりと伸びたズボンの足を親柱の頂きに掛けた無作法さが目につく。犬や猫がよくするように、何ごとか思案する具合に頭を左に傾け気味にしている。助けようかどうしようか迷っているとも取れ、まったくの無関心とも映った。

ここより先は真西へ、直線の流れに変わる。左岸はお茶屋と料亭が隙間もなく建ち

ならぶ。ふつうの歩行者なら川にせり出した裏座敷の様子を葦簀ごしに覗くことも容易だが、こんな角度からでは叫んでも聞こえるはずはない。右岸はといえば柳と桜が交互に植えられ、石畳の路に対してちょうど目隠しの役割を果たしている。

突然、緑がかった黒い頭の鳥が「クァー、クァー」と鳴きながら舞いあがった。「色や形が立派なおかげで昔の天皇はんから位を貰わはった」と物識りの祖母が教えてくれた、五位鷺だ。エビ、カニを漁っているさなか、思いがけぬ大きな漂流物に胆をつぶしたらしい。消し忘れの雪洞が明るさを取り戻しはじめているところよりすると、夕暮れも近いのかもしれない。緋鯉や真鯉が耳もとで跳ねたり、素肌を擦っていく回数も増えたようだ。

縄手の通りまでのあいだ、もはや橋らしい橋はない。そのかわり、いくつもの料亭が裏口に桟橋を架け、人目を憚らねばならぬ馴染み客を迎えるのに利用している。今しも『白梅楼』の勝手に通じる一つをくぐり抜けながら視線を投げると、狐面の男が川面を窺う眼とまともにぶつかった。さて、それからが目まぐるしい。桟橋の数は二つや三つではない上に、互いに少なからぬ距離をへだてている。鴨川に近づき水深の増した分、しだいに速くなる流れに劣らぬスピードで先回りするとはどんな健脚の持

主なのだろうか。しかも次つぎ現われる桟橋には判で押したように、空ろなくせに妙に人間臭い、あの顔が眺め下ろしているのであった。

この期に及んでも胸もとから毬を放そうとせぬ気強さが奇蹟のように思えた。よしんばいまさら両腕を自由にして這い登ろうとこころみても、この辺まで来ると岸の石垣は大人の背も届かぬほどに峙っている。瀬音の高まりは堰の接近を予告しており、恐れがふくれあがる。それでも琴子の心は後にも先にも味わったためしのない至福に満たされていた。

大和橋をくぐる。縄手の大通りが真上を走り、人も車も織るように往き交う地点だ。クラクションや大原女の売声をかすかに聞いた気もするが、定かではない。石欄に同じ顔が凭りかかっているかどうか、確かめる暇もなく、渦に巻きこまれた。

白川の果てであった。廓の親たちがどんどんと呼んで、子どもを近寄らせぬよう気をくばっている滝つ瀬だ。いったん足を踏み滑らせて転落すると、大の男でさえ無事に帰ることはむずかしいと噂される。堰の手前が滝壺のかたちにえぐれ、霧のような蒸気がつねに立ち迷っている。鴨川の河川敷とのあいだには四、五メートルもの高低差があり、豊かな水量が堰のまんなかを截ち割る勢いで一気に落下する。度重なる事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com